

# 令和6年度 荒木小学校研究構想(案)

## (1) 研究主題

「友達との学びの中で、自分の思いや考えを深め、主体的に学ぶ子どもの育成」(3年次)

## (2) 主題設定の理由

〈今日的な課題より〉

子どもを取り巻く現代社会は、10年後・20年後はどうなっているか予測不能な加速度的に変化の中にある。世界中の人々とインターネットやSNS等を通じてつながり、さまざまな情報を容易に得ることができるようになってきている。なかでもSNSは日常的なコミュニケーションツールとして広く利用されるようになり、コミュニケーションの仕方も変わってきており、人間関係に与える影響も少なくない。人々の価値観や生活様式が多様化している一方で、人間関係の希薄化等で他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ち、人間関係を形成する力の低下などの傾向が指摘されている。そのような社会において、学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、様々な情報を見極め、主体的に判断しながら、自分を社会の中で位置付け、自己理解や他者理解を深め、多様性を認め合い、他者と共に生き、課題を解決していくための力が必要となってくる。そのために、新学習指導要領では、育成すべき資質・能力として

① 何を知っているか、何ができるか (知識・技能)

② 知っていること・できることをどう使うか (思考力・判断力・表現力等)

③ どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか (学びに向かう力・人間性等)

を3つの柱としている。「主体的・対話的で深い学び」を通して、これらの資質・能力は高められていく。「どのように学ぶのか」という学びの質や深まりを重視し、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動するための指導方法を充実させていくことが提言されている。

〈本校の学校教育目標より〉

### 学校教育目標

自分の考えをもち 他者と協働し 未来を切り拓く、心豊かな子どもの育成  
～「夢」「愛」「力」のある荒木の子どもたちの育成～

### めざす子どもの姿

○「夢」・・・○人の話をしっかり聴ける子 ○自分の考えを深め、伝える子

○「愛」・・・○「命」を大切にする子 ○ふるさとを愛する子

○「力」・・・○健康づくりに取り組む子 ○自分の命を自分で守れる子

自他を取り巻く様々な課題や環境に対して、主体的に考え、判断し、他者を大切にしながら、明るく元気に最後までやり抜く、心身共にたくましい子どもを育てたいと考える。

### 〈子どもの実態から〉

本校の児童は、明るく素直で、友達同士・上学年・下学年の仲もよい。同学年の児童をはじめ、縦割り班活動などで、たくさんの人と関わりながら学習や活動をしている。しかし、クラス替えで人間関係が毎年変わることにより、集団になじむまでに時間を要したり不安に感じたりする児童もいる。

令和元年度からは、大社中校区全体でだんだんタイムに取り組んできた。相手の話を聞く力をつけ、よりよい人間関係を築くことをねらった活動である。本校でも、隔週金曜の朝活動に、各学級で実施している。誰もが答えやすいテーマに対して、グループの一人一人が順番に話す活動で、「活動の始めと終わりにはあいさつをする」「うなずきながら話を聞く」「活動の説明をよく聞く」という3つの約束のもと行っている。毎年の継続により、児童は活動に慣れており、自分のことを話したり、相手の考えを受け止めたりしながら取り組んでいる。

学習状況の実態としては、児童は課題に対して、まじめに取り組んでいるが、自分の考えを発表する場面では、一部の児童の発言に偏りがちである。令和4年度の学力調査やアンケート Q-U の結果から、自ら進んで発言や質問をするといったことには消極的であることが分かった。また、基礎・基本的な内容の定着、「問われていることを正しく読み取る力」や「自分の考えを論理的に、自分の言葉で表現する力」に課題があることも伺えた。

このような実態から、今年度は、課題に対して自分の考えをもち、自分の思いや考えを進んで伝えることができる子ども、そして、その考えを友達との学びの中で広げたり深めたりすることができる子どもを目指して研究に取り組むことにした。昨年度までのだんだんタイムでの取組を生かし、一人一人が主体的に学習に向かい、考えを広げたり深めたりする手立てに視点を当てて研究を進めていきたいと考えた。

研究主題	めざす児童像
友達との学びの中で自分の思いや考えを深め	・ 人の話をしっかり聴くことができる児童 ・ 互いを認め合いながら関わるすることができる児童 ・ 友達との対話を通して学びを深める児童
主体的に学ぶことができる	・ 自分の考えを進んで伝える児童

### (3) 研究の目標

課題に対して自分の考えをもち、互いの考えを伝え合う中で、自分の考えを広げたり深めたりするには、どのような指導の工夫を行うとよいのか、授業実践を通して見出していく。

### (4) 研究仮説

「つけたい力」やどのような「見方・考え方」を働かせるのかを明確にしたり、対話の必要性がある課題を設定したりすれば、自分の思いや考えを深め、主体的に学ぶ児童が育つであろう。

### 〈具体仮説1〉

「めあて」に迫るための「見方・考え方」や「つきたい力」を明確にすれば、考えたことを進んで伝える児童が育つであろう。

- ① 課題を提示し、課題を達成するために何に着目するとよいのか、児童の発言を取り上げながら「めあて」を設定する。
- ② 「めあて」は、解決の見通しがもて、それぞれの教科の「見方・考え方」を働かせて、課題解決できるように意図して設定する。  
例えば、国語科ではどんな言葉に着目して読み取るのかなど、「言葉による見方・考え方」を働かせる。算数科では事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道を立てて考えることができるようにしていく。
- ③ 授業スタンダードを用い、つきたい力を明確にし、本時の評価における児童の具体的な姿やその見取りの方法を明らかにする。
- ④ 本時に働かせたい「見方・考え方」を指導案に明示する。

### 〈具体仮説2〉

対話の必要性がある課題や対話の方法を工夫すれば、その対話を通して自分の思いや考えを深める児童が育つであろう。

- ① 根拠をもちながら対話できるように「お・も・ち・な・い・す」の視点で考えられるような課題を設定する。  
お・・・「同じところは」→共通点                      な・・・「なぜなら～」→理由  
も・・・「もし～だったら」→もしも                      い・・・「いつでも使えるかな」→きまり  
ち・・・「違うところは」→違い                      す・・・「気に入ったところは」→よさ

- ② 考えを可視化する方法（思考ツール等）や対話の場を工夫する。

## (5) 授業づくりを支える基盤

### ① 集団づくり

「だんだんタイム」の内容を工夫し、隔週で行うことで、互いを認め合いながら関わり、自分の考えを進んで伝えられるようにするための集団づくりを行う。

### ② 学力向上

朝のスキルタイムの充実や家庭学習の習慣化の働きかけを行う。また、多様な表現方法やドリル学習による基礎基本の定着のため積極的なICTの活用を行う。

### ③ 体づくり

学習に集中して取り組めるよう、授業中の姿勢づくりや30秒腰骨座りを行い、心と体を整える。

## (6) 検証方法

・授業中の児童の様子やワークシート、ノート等で児童の変容を見取り、評価する。

- ・授業実践や研究協議を通して、取り組みを分析する。  
(授業プランシート作成→指導案作成→指導案検討→授業研究シートによる振り返り)

## (7) 研究計画

- 全員1人1回ずつ、研究授業を行う。
  - ・授業教科は、学年会で話し合い決定する。
  - ・授業プランシートを使用し、授業を構想する。(手書きでよい)
  - ・構想した授業の指導案を作成する。(指導案例参照)
  - ・学年会で指導案検討を行う。
  - ・指導案を、授業2日前までにデスクネットで全員に送信。
  - ・授業は、授業研究シートを記入しながら参観する。  
(学年部会以外でも可能な方は積極的なご参加を。)
  - ・授業後、授業研究シートをもとに協議をする。(進行 記録：研究部)
  - ・協議の記録を全員に配付。

※各学年会で、授業をする教科、授業日を検討する。(5月末日まで) 6年会は社会科

- 訪問指導の際には、通常の学習指導案を用意する。
  - ・学年部の協案審議のうえ作成⇒ 起案 ⇒ 完成
  - ・事務所送付は1週間前
  - ・事前に職員会議で授業内容の説明をする。

## (9) 授業研究部会 ( )は研究部

低学年(斎藤・藤原・増崎)	中学年(天野)	高学年(前島・竹下)
齋藤・藤原・西村・浅津・増崎・三吉・勝部教頭	山口・天野・榎本・大國・岩石・野津・藤江主幹	野田・竹下・前島・重栖・福城・持田・永瀬校長

※特新担の授業研究の訪問指導は無し。(ただし8月の研修後、希望すれば有)

※学力向上に係る訪問指導は有り。

※初任者研修に係る訪問指導は有り。